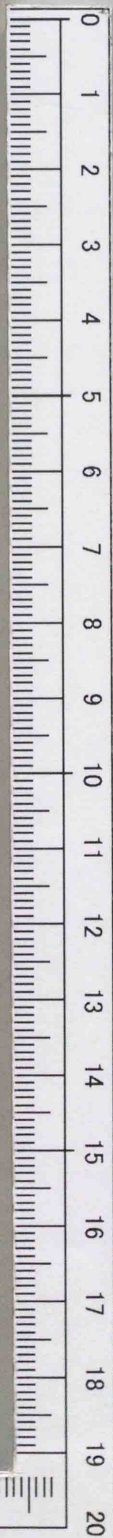




375.9
Dec 8
資料室



41696

教科書文庫

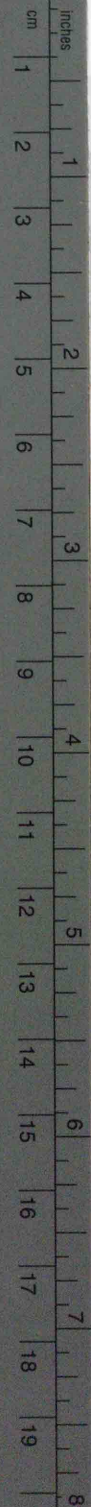
4
810
41-1912
2000302690

Kodak Gray Scale



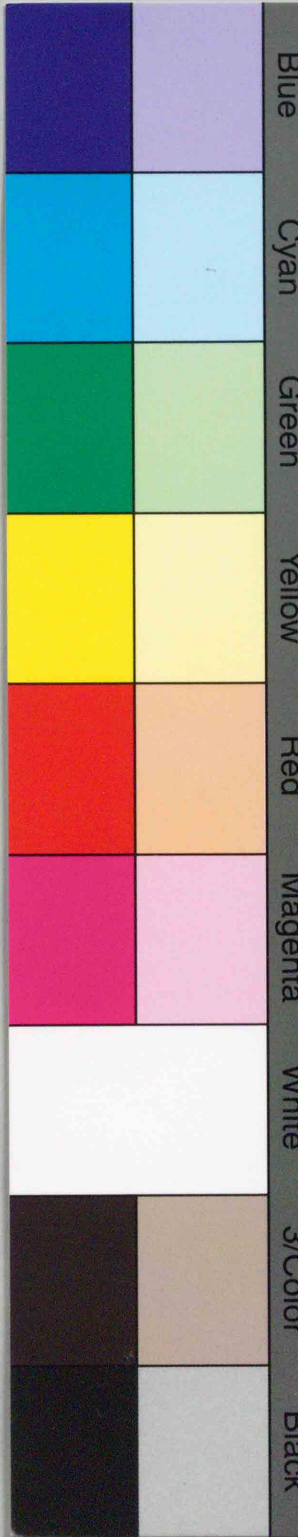
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
0c8



訂修
中等國語讀本卷三目次

一、	列聖遺芳……………	一
一、	物見車……………	一
二、	紅葉の山……………	三
三、	いかづち……………	四
二、	高山彦九郎……………	五
三、	櫻……………	三
四、	星と花（新體詩）……………	一七

五、讀書の樂……………一九

六、わが幼時……………二二

七、おのれを屈せよ……………二九

八、良雄の僕……………三三

九、孝道……………三九

一〇、舊師におくる（書簡文）……………四五

一一、アレクサンドル大王の逸事……………四九

一二、日本海の大戦 その一……………五八

一三、日本海の大戦 その二……………六五

一四、生存競争……………七一

一五、奮闘（格言）……………七九

一六、伊能忠敬の晩學 その一……………八〇

一七、伊能忠敬の晩學 その二……………八四

一八、時……………八九

一九、南極探検 その一……………九四

二〇、南極探検 その二……………九八

二一、端艇につきて友人に贈る（書簡文）……………一〇二

二二、農業の快樂……………一〇七

二三、レシングの比喻譚……………一一〇

二四、殊勝なる武者振……………一一三

二五、 流泉啄木 (新體詩)……………一一八

二六、 佐久間大尉……………一二一

二七、 わが小園……………一二八

二八、 ボアソナード氏を送る詞……………一三二

卷三目次終



訂修中等國語讀本卷三

一 列聖遺芳

一、 物見車

後三條天皇は、御性剛健、嚴明の君にましましけり。東宮におはしけること二十四年、この間、深く、世故に練熟し、政務の得失を辨へさせ給ひければ、御即位あらせらるるや、精を勵して、百方、治を圖らせ給ひけり。當時、代代外戚たりし藤原氏、大いに、專横を極め、華

大いに
(大きに)

奢風を成し、淫猥俗を作せり。天皇、いたくこれを惡ま
せ給ひ、躬親ら率先して、節儉を行はせ給ひ、前代まで
行はれし、諸國よりの進贄を停められ、常に、檜の柄に、
藍紙貼りたる扇を用ゐさせ給ひ、青魚頭を炙り、胡椒
をぬりて、御膳に充てられけり。

また、石清水行幸の途次、鹵簿を拜觀する都人士女
の車にして、金飾あるものは、わざと、鑿輿を駐めて、悉
く、これを剝し取らしめ給ひけり。されば、後、賀茂の行
幸ありける時には、金物剝したる痕ある車のみ立ち
ならべりけりとぞ。奢侈の風の、頓に革れるさま、以て

石清水

男山八幡宮な

り。山城國

綾喜郡にあ

り。

賀茂

上下二社あ

り。共に同國

愛宕郡。

想ふべし。

二、紅葉の山

給ひ。

高倉天皇、御年十歳ばかりの御時にや、極めて、紅葉
を愛し給ひ、御庭の中に、小山を築かせ、櫨、楓の色美し
きを植ゑさせ給ひて、紅葉の山と名づけて、賞翫し給
へり。然るを、一夜、野分の風吹きすさびて、紅葉、悉く散
りはてぬ。翌朝、殿守の仕丁等、朝清めすとして、残れる枝、
散れる木の葉をかき集めて、酒を煖むる薪としてけ
り。奉行の藏人、この有様に驚きあきれて、如何なる罪
科にや行はれんと、懼れ畏みて居たるに、天皇、やがて、

林間煖酒云

唐の白居易の詩。次句は、「石上懸詩掃」
「綠苔」。

怖ぢ。

論語

四書の一。孔子の語を録したるもの。

己に克つとは云。宋人謝上蔡の詩。

行幸あらせ給ひ、「紅葉はいかに」と御尋あり。すなはち、只、ありの儘を奏聞す。天皇うち笑ませ給ひ、「林間煖酒焼紅葉」といふ詩の風流を、誰が教へけるぞや」とて、却りて叡感ましましけり。

三、いかづち

近世の英主、後光明天皇は、御性、雷鳴を怖ぢ給ふこと甚しく、夕立の氣色ある日には、常に、御心地勝れさせ給はざりけるを、御親らも、深く、いひがひなく覺し給ひけるが、後、論語の「克己復禮」の註に、「己に克つとは、性の偏りて、克ち難き所より克つべし」といふ語ある

仰いで
(仰ぎて)

を見給ひ、豁然として、悟り給ふところあり。一日、雨風烈しく、雷凄しく鳴りはためく時に、倚子を、御簾の外に設けしめ、その鳴り歌むまで、天を仰いで、端坐し給ひ、神色自若として、毫も變らせ給はざりき。これより後、雷鳴を懼れ給ふ御心やみ給ひけりとぞ。

二 高山彦九郎

高山彦九郎は、上野新田の人なり。余が二十ばかりの時、來りて一宿せり。この人、鼻高く、目深く、口廣く、體高くして、總髪なり。常に、勤王の志あつく、歴代天皇の

高山彦九郎名は正之。林子平、蒲生君平と共に、寛政の三奇人の稱あり。(二四〇七年—二四三年)

御諱、および、山陵の如き、諳記して、一も誤らず。談、たま
たま、王室の衰へたることに至れば、かならず流涕せ
り。六十餘國を遊觀せんと、四方をうちめぐりしが、そ
の間の奇事、異行少からず。

ある時、備前の閑谷の學校に宿りて、その學制、規約
などを尋ねしに、教授の人、書物一冊を出して示した
り。翌朝、早く、その寢室に行きて見れば、彦九郎は、明く
るも知らず、燈に對して、その書を寫し居たり。猶、半枚
ばかり残れるを、やがて寫し終へしが、すべて、五十葉
ばかりの寫本なりきとなん。

閑谷の學校
和氣郡閑谷村
にあり。池田
光政の創立。

姫路
飾磨郡にあ
り。酒井氏の
舊城下。

内侍所の御
神樂
十二月中の吉
日な擇みて行
はる。内侍所
は宮中溫明殿
内にありき。



高山彦九郎肖像

それより、播磨に赴き、姫路の北郊なる相識の人の
家に宿れり。あくる日の夕つ方、暇を乞ひて、出でんと
するを、主人とどめて、時は節季なり、日は暮れかかれ
り。明朝立たれよといひしに、これより、但馬に行き、年
内に、京に出でて、内侍所の御神樂を拜聞せんと思へ
り。日數限あればとて、強
ひて出で立ちぬ。
さて、その翌春、かの北
郊の百姓の、罪ありて、獄
に下されしものが、赦さ

乞ひ。

れて歸り來れり。その者、獄中の事を語りし中に、「同じ獄に、一人の山賊あり。種種の話の末に、「山賊をなして、深山に、夜を明したらんには、おそろしき獸などにもあひ、又、天狗などいふ者をも見しならん」と問ひしに、賊のいはく、「十餘年、山に棲みしかど、別に、おそろしきものとしては見ざりしが、唯一度、これありき。去年某月某夜、某の山中にゑみて、人を待ちしに、大いなる男一人出て來るを見て、われら四人立ち塞りて、酒錢を乞ひしに、その人、大音にて、「慮外者め」と叱りて、傍に、人なきが如く、しづしづとして過ぎ行きしが、その聲の大

考ふる

きさ、その眼の銳さ、これこそ、天狗などいふ者にてもありつらめ」とぞいひし」といふ。この事を、かの主人聞きて、月日を數へて、「その時刻と、その土地とを考ふるに、その人は、必ず彦九郎ならん。かの山中を、節季の夜半に、一人過ぐる人、外には、よもあらじ」とて、舌を捲きたりとぞ。

また、彦九郎、江戸にありし時、新田のあたりに、百姓一揆起りぬ。かくと聞くや、取るものも取りあへず、路程、二十里あまり、夜道を厭はず馳せ著きしが、一揆は、既にをさまりしかば、その夜、また、直に、江戸に還れり

頼萬四郎
儒者。名は惟
柔、杏坪と號
す。安藝の人。
(二四一六年
一、二四九四
年)

名主
一村、又は數
村の長。
年寄
名主につぐ
職。

携へ。

とか。頼萬四郎、その頃、江戸にありて、詳しく、その事を
知りて、「この輩、亂世にあらば、一方に向ひて、必ず、大功
を立つべし」と、時々語りて、歎稱せり。
さて、その地に、偉人あれば、村吏などの惡むこと、い
づ方も同じことなるが、彦九郎が郷里は、ある旗本の
領地なり。その名主、年寄などいふ者、いかにいひいれ
しか、ある時、領主の邸へ呼ばれ、百姓にて、平生、長き大
小を横たへ、家業を務めず、書物のみ讀むは、不審の者
とて、數月の間、門側の一室におし籠められしが、懇意
の朋友の、酒肴を携へて訪ひ來るもの、虚日なし。ある

大府
徳川幕府のこ
と。

日、大府の一有司の邸に召されて、その方、何故に、諸國
を遊行し、名ある人を尋ね行くか。仔細ぞあらん、一一
申し上げよ」といはれければ、彦九郎、亂世には、武者修
行といふ事の候ふよし承り候ふ。今、太平の御世に候
へば、諸國に、名ある人を搜し求めて、よき事を聽かん
とするにて候ふ。そのよき事と申すも、忠孝の事より
外にては候はず」と申しければ、「さらば、この書を講釋
せよ」と、論語を、一卷いだされけるに、彦九郎、いささか
も臆せず、辯舌あざやかに、講說しけり。かくて、數日の
後、又、かの有司の邸に召されて、講釋せしめられしが、

そのをりに、次の間に、人ありて、その説を書き留めたりといふ。その後、又、數日ありて、召しいだされて、名字を名告り、大小を帶し、諸國を遊行する事苦しからざる旨達せられけり。

久留米
筑後國三井
郡、有馬氏の
舊城下。

それより、年を経て、薩摩に遊びしが、歸途、久留米の某が家に宿りて、腹切りて失せぬ。人、その故を知らず。或人の話に、村吏の誣ひし事も、何の咎もなく免されしは、某侯の當途の時なりき。その後、某侯、職を辭し給ひければ、その身も、便なき事に思ひて、失せにけるにや」といふ。されど、それは、命を棄つべきほどの事にもあ

某侯
老中松平定信
なりとぞ。

らざれば、他に、なにか、深き仔細のありし事ならん。猶この人の事に就き、聞き及びし事もあれど、今はしるさず。(菅晉帥一筆のすさび)

三 櫻

わが日本の國花として、世界に誇るに足るものは、櫻であらう。今、支那でいふ櫻桃が、櫻に相當するといふことであるが、日本の花の美しさには及ばないといふこと。西洋のチェリーも、實は大きい、花の色は薄い。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め、谷に満ち、雲と

美しい
(美しき)

まがひ、雪とまがふ景色は、日本特有の美景である。支那の國花は牡丹である。その濃艶な粧は、美しいには、相違ないが、あつさりとした日本趣味ではない。香氣、鼻を衝く薔薇の色も、棄て難く、美しいものであるが、これも、艶冶の態があつて、清楚、人を動す野趣に乏しい。しかし、薔薇は、歐米人の、花の王と稱するものである。

日本の櫻は、その色は、極めてあつさりとして居る。但、純白では無い、いはゆる櫻色である。その瓣は、極めて薄い。一樹に、無數の花を著けて、咲く時は、一時に、爛

そはつて
(そはりて)

花ぐはし櫻
日本書紀允恭天皇、花ぐはし、櫻のめで、ことめでは、はやくはめでず、わがめづるこら。

漫と、殘なく咲く。上品な大宮人の風もあつて、楚楚とした野情もそはつて居る。空青く、水清い日本の氣色には、最もよく釣り合つて、深山、都市、どこにあつても、皆宜しい。甘日草の長い盛もなく、薔薇花の高い香氣も無いが、とにかく見事である。その、散つて、空に知られぬ雪と降つては、一段の風趣があつて、殆ど、言語に絶してゐる。日本の花の中の花は櫻である。古く、花ぐはし櫻と歌はれたのは、蓋し、これがためである。櫻の咲くのは、春の末である。春の日本は、水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない日和

吉野山の歌
八田知紀の
作。

花の雲の句
松尾桃青の
作。
鐘一つ云云

を、花曇といふ。夜は、照りもせず、曇りもせぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には、最もふさはしい景色である。春の特色は、どこまでも、駘蕩といふ點にあり、溫和な所にあり、峻嚴、猛烈といふ心の、微塵も無い所にある。櫻は、この時候に孕まれて咲き出る花である。きは立った特色の無い所が、即ち、その特色である。

「吉野山、霞の奥は、知らねども、見ゆる限は、櫻なりけり、これは、満山、花に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。花の雲、鐘は上野か、淺草か、これは、鐘一つ賣れぬ日も無き」大都會の花に掩はれた光景である。櫻

榎本其角、鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春。

愛でる
(愛づる)

は、牡丹、薔薇のやうに、花瓣を賞翫する花では無くして、木として賞翫する花である。否、多くの木を集めて、人は、唯、花中に在って賞翫する花である。上から、下を見て、愛でる花では無くして、下から眺めて、愛でる花である。春風四月、日本人は、しばし、花の世界の人となるのである。(芳賀矢一「月雪花」)

四 星と花 (土井林吉)

おなじ自然の、おん母の、
御手に育ちし、姉と妹、

みそらの花を、星といひ、
 わが世の星を、花といふ。
 かれとこれとに、へだたれど、
 にほひはおなじ、星と花。
 ゑみと光を、よひよひに、
 かはすもやさし、花と星。
 さればあけぼの、雲白く、
 御空の花の、しほむ時、
 見よ白露の、ひとしづく、
 わがよの星に、涙あり。』

五 讀書の樂

四時につきて、いつをも分かず樂しきは、書見る樂なり。春夏は、日の長きにつけ、秋冬は、夜の長きにつけて、その樂盡くる時なし。

この樂は、いかなる富貴の樂にも換へ難きものなり。ことに、經傳を讀めば、そのたび毎に、まのあたり、聖賢の教を聞くが如き。こちせられて、その尊さ、いふべくもあらず。狄仁傑が、名教のうち、かぎりなき樂あり。何ぞ、俗人と語る要あらん」といへるは、誠にさるこ

狄仁傑
 唐の名相。字は懷英、中宗の時梁國公に封ぜらる。(一三六〇年)

とと覺ゆ。

古語にいはく、「一日讀書すれば、一日の益あり。一卷讀書すれば、一卷の益あり」と。又、いはく、「人の智を増すものは、書に若くことなし」と。歐陽修は、また、天下の樂終日、書案にあり」といへり。嗚呼、智を増して、しかも、その間に、大いなる樂を受くることを得るなど、天下、また、かかる有益なるものあらんや。さるを、世には、この樂のかくの如く大いなるを知らざるもの多し。をしむべきなり。

これを、物に譬ふれば、わが國にうまれて、富士の雪、

歐陽修
宋の大儒。字は永叔、晩に六一居士と號す。最も文章に名あり。(一六六七年—一七三二年)

譬ふ。

吉野の花を見ざるが如し。いかにもくち惜しきことならずや。まして、人とうまれて、人の道を知らず、古今の事、萬物の理に暗からんは、その憾、何ぞ、嘗に、富士、吉野を見ざるのみならんや。誰も誰も向はまほしきは、讀書の樂なり。(貝原篤信—樂訓)

吉野の花を見ざるが如し。いかにもくち惜しきことならずや。まして、人とうまれて、人の道を知らず、古今の事、萬物の理に暗からんは、その憾、何ぞ、嘗に、富士、吉野を見ざるのみならんや。誰も誰も向はまほしきは、讀書の樂なり。(貝原篤信—樂訓)

寛永寺
東叡山のこ

父
名を正濟といふ。

六 わが幼時
わが幼き頃、上野物語といふ草紙ありけり。これは、
寛永寺の花見に、人の群れ來る事どもを記せるなり。
わが三歳の春の頃、火燧に、足をさして、腹這ひ居て、そ
の草紙を見ながら、筆紙を求めて、透寫しけるを、母人
の見給ひて、十の中、一二は、まことの文字もありけれ
ば、わが父に見せ參らせられしを、父の友人の來り見
しより、人人も聞き傳へて、その寫しし物どもを取り
傳ふる事となりたりき。

その後、常の戲に、筆執りて、物書く事のみをしけ

往來物
日用文を集め
たる書の稱。

戸部
上總國久留利
の藩主土屋民
部少輔利直。
戸部は民部省
の唐名。

わが幼き頃、上野物語といふ草紙ありけり。これは、
寛永寺の花見に、人の群れ來る事どもを記せるなり。
わが三歳の春の頃、火燧に、足をさして、腹這ひ居て、そ
の草紙を見ながら、筆紙を求めて、透寫しけるを、母人
の見給ひて、十の中、一二は、まことの文字もありけれ
ば、わが父に見せ參らせられしを、父の友人の來り見
しより、人人も聞き傳へて、その寫しし物どもを取り
傳ふる事となりたりき。

ワガ幼時



れば、おのづから、日に、文字を
も見知りたれど、物讀む師友と
すべき人なかりしかば、只、往來
物の類などを讀み習ふのみな
りき。戸部の家人に、富田とて、生
國は、加賀の國の人と聞えしが、
太平記評判といふ書を傳へて、
その事を講ずるあり。夜夜に、わ
が父など寄り合ひつつ、それを
聽聞せられしが、わが四五歳の

時、つねに、その座に侍りけるに、夜、いたく更けぬれど、終に、座を起ちしこともなく、講畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどもありしを、人人、奇特のことなりといひあへりき。

六歳の夏の頃、上松といふ人の、少しは、文字などありけるが、七言絶句の詩三首まで教へて、その意を解き聞かせられつるに、やがて、誦を成して、そを、人にも吟し聞かせたりき。この兒、才あり。いかにも、師を擇びて、學ばしめらるべしなど、かの人もいひしかど、頑なる昔人等のいひしは、昔より利根、氣根、黄金の三こん

無くては、學匠になり難しといふなり。この兒、利根こそうまれ付きたらめ、猶幼くして、その氣根の程も測り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事も心得られずなどいひあへりしに、わが父も、戸部の御いつくしみ深く、常に、御側を離し給はねば、學に入れ、師に従はしめん事も協ふべからず。されど、彼の、幼きより物書く事をば、人人に語り誇らせ給へることなれば、せめては、物書き習ふことのみは、せさせたきものなりとて、わが八歳の秋、戸部の、上總の國に行き給ひし後に、手習ふことを教へられたり。その冬の十二月に、戸部

歸り給ひしかば、常に、傍に侍ふこと、元の如く、明年の秋、復國に行き給ひし後にて、課を立てられて、日の中には、行草の字三千字、夜に入りて、一千字を限りて、書きいだすべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課、いまだ満たざるに、日暮れんとすること、度度にて、西向なる竹縁の上に、机を持ち出でて、書き終へぬることもあり。又、夜に入りて、手習ふに、睡の催して、堪へ難きに、われに附けられたる者と、ひそかにばかりて、水二桶づつ、かの竹縁に汲み置き、いたく、睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄てて、まづ、一桶の水をかぶり

堪へ。
(絶え)

て習ふに、一時は、その冷なるに目覺むるこころすれど、しばし、程經ぬれば、身暖になりて、またも睡くなりぬ。また、水をかぶること、前の如くして、二たび、水をかぶりぬる程には、大やうは、課をも充てたりき。これ、わが九歳の秋冬の間のことなり。

かかりし程に、この頃よりは、わが父の、人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたりき。十一歳の秋、また、課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の内に、淨寫して、參らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに、事を終へつれば、冊になして、戸

庭訓往來
支憲法印の作
といふ。十二
月往復の書簡
文なり。

部に見せ參らするに、褒め給ふこと大方ならざりき。十三の時よりは、戸部の、人と贈答し給ふほどの文ども、大方は、われに命ぜられき。

教ふる

又、十一歳の時に、わが父の友なる關某の子は、太刀打の技に勝れて、人に教ふることありしを、われにも、この技教へられんことを望みしに、「わぬし、いまだ幼し。これらの技學ばんこと早かり」といふ。さこそは侍るべけれど、太刀使ふこと、少しも心得ざらんには、刀脇差、腰にせんこと、誠に不用のことにや」といひしかば、「そのいふところ、誠にことわりなり」とて、一つの技

を傳へて、習はしめられたり。

かかりし程に、その年、十六になれる者の、われと、藝を試みんといひしかば、木刀を取りて、三度合ひて、三度まで勝つことを得たりき。その後、常に、かかる武藝の事どもを好みて、手習ふことなど、心にも染めずありしかど、物讀む事は好みければ、わが國の物語、草紙等の類をば、殆ど見つくせり。(新井君美一折たく柴の記)

七 おのれを屈せよ

ベンジャミン、フランクリンの、まだ、十八歳の若者

ベンジャミン、フランクリン
電氣學の祖。
（二二六六年
—二四五〇
年）
ポストン府
北米合衆國マ
サチューセツ
ツ州の首府。

なりし時、ポストン府なる一老儒の許を訪れしことありき。その人は、心ちよげに、この少年を迎へて、何くれと物語せしが、やがて、彼を導きて、食堂に入らんとせり。その入口の戸は、頗る低くして、身を屈して入るにあらずば、その人の頭は、必ず、鴨居に當るべきほどなるを、年少氣銳のフランクリンは、いま、老儒との快談によりて、意氣、頗る揚れる折なりければ、さる事には、少しも心づかて、ただ一直線に進みぬ。屈むべし、屈むべし」と、老儒の叫びしかど、耳にも入らばこそ、已に、頭を、鴨居に撲ち付けたり。

「嗚呼、心なき少年よ。こは、まことに小事なり。されど、汝は、よく心して、常に、この一小事を忘るることなか



像 肖 ンリクンラフ

れ。年少氣銳の人は、常に、その眼を、高所に置きて、一たびも、わが身邊を顧みざるものなり。不測の禍、實に、そこに發らんとす。危きこと、板上に、玉を

走らしむるが如し。思へ、汝の途上には、常に、汝の頭を打たんとする、數多の鴨居あることを、心して、おのれ

を屈するにあらずば、數多の大傷は、絶えず、汝の額上に印せられん。かくて、汝は、遂に、成業の期なけんと、老儒は、懇にいひ聞かせぬ。

フランクリン、まさに、六十九歳の老年に達せし時、ふと、この老儒の遺子に邂逅せり。その折、彼は、當時の記憶を語り出でて、汝のなき父君の親切なる教は、意氣燃ゆるが如くなりし、當時のわが心裏に、いひがたき、深き訓戒を與へたり。かくて、一旦、かうと思ひ立ちし志の、止めんにも止め難く、あはや、心の駒の狂ひ出さんとせし折折、わが心の底より涌き出でて、われと、

かうと
(かくと)

わが無謀の行を止めしものは、そのおのれを屈せよとの一語なりき。われは、まことに長く、その恩澤に浴したり。さても、世に、わが身の才智のみを恃みて、猛進せんとする、少年客氣の振舞ばかり危きはなし」といひき。

八 良雄の僕

元祿十五年十二月十五日、^{牙え}たる月影も薄らぎ、昨日降りし雪の上より、夜は明けぬ。朝風さむき兩國橋を、同勢あまた、火事装束に、身を固めて、足竝勇しく、

泉岳寺
禪宗。萬松山
と號す。

西へ渡るは、これぞ、赤穂の浪士四十餘人が、今しも、本望を遂げて、高輪の泉岳寺に引き上ぐるなりける。見驚き、聞き驚きて、噂は、忽ち、江戸中に弘り、諸國に弘りぬ。何處の里も、その評判のみ喧しく、浪士の平生の事、その一族、從僕の事までも、多く、世に傳れり。

大石良雄
（二三一九年
—二三六三
年）

四十餘人を指揮せる大石良雄は、通稱を、内藏介といふ。もと、千五百石の祿を食みて、淺野家の國家老なりき。小兵にして、聲低く、詞すくなく、立居、振舞も靜なり。寛文の頃、山鹿素行、罪を、幕府に得て、赤穂に預けらる。素行、經學と兵法とを以て、天下に、名あり。一日、赤穂

山鹿素行
兵學家、山鹿
流の祖。名は
高祐、會津の
人。（二二七二

年—二三四五
年）

侯に對ひていはく、日頃の厚遇、謝し奉るに、辭なし。聊か、御恩に報いんが爲に、心腹を傾けて、諸士を教へたり。蒔きたる種は、生ゆる時も候ふべし」と。良雄も、これに學び、又、京に出でては、伊藤仁齋の門に入れり。仁齋評して、この人、愚なるが如くなれども、庸器にあらず。必ず、大事に堪へん」といへり。赤穂の封奪はれし時、諸士狼狽して、なすところを知らず。良雄、日頃は重用せられず、才ありとも見えざりしが、この時に至りて、少しも、周章てたる色なく、事務を處理すること、流るるが如し。諸士、始めて、その器量に心服して、進退を一任

伊藤仁齋
儒者、堀河派
の祖。名は維
楨、京都の人。
（二二八七年
—二三六五
年）

報悔老い

し、その指揮に従ひて働くこと、手足の如くなりき。
 赤穂の城を明け渡して後は、諸士、思ひ思ひに離散
 せり。良雄も、亦國を去つて、洛東山科に移らんとす。嘗
 て召し使ひし老僕八介といふもの、暇乞にとて來り、
 「わが君、今出で立ちたまはば、御目にかかるも、これが
 終なるべし。われ、かく老い朽ちて、御供に立つことの
 かなはぬこそ残念なれ。せめては、形見の一品にても
 賜りたし」といふ。良雄、頭を撫で、今度の騒動にて、われ
 も、途方にくれぬ。重ねての仕官も面倒なれば、都近き
 田舎の百姓となりて、やすらかに、一生を送らんと思

ふなり。長長、實義に奉公してくれたる禮に、何なりとも
 與へんと思へども、今の身の上なれば、心に任せず。せ
 めては、これだけにても收めくれよ」とて、十何兩かの
 金を取り出して、與へたり。

八介、その包を取つて投げ、げがらはし、わが君、老い
 ぼれたれども、八介、金がほしさに參るべきか。日頃丈
 夫の御心も腐り候ふか、亂れ候ふか。金が大事ならば、
 君こそ御貯あれ。思へば、代代高恩の御城主は、恨を吞
 んで、御最期あり。赤穂一面、野も山も、空しく、人手に渡
 るを見ては、われら如き下郎すら、胸も涌きかへるに、

吞んで
(吞みて)

や
あ
あ
あ

三百人の侍、揃ひも揃うて、腰拔侍にて候ふことの悔
しや。いつの爲とて、御城主は、侍を養ひ給ひしぞ。赤穂
の武士に、一人も、魂あるものなきか。口惜しや」と罵り
て、涙を、はらはらと流せり。

良雄は、俯きて、物をも言はず。や久しうして、われ
過てり。真直なる、汝の諫は、永く忘れじ」とて、やがて、筆
を執つて、主従二人の姿を畫き、これを見よ、八介。これ
は、わが若かりし頃、江戸にて、汝を、供につれて歩きし
様を寫せるなり。昔を思ひ出し、これを、形見に參らす
とて與ふれば、八介も、やうやう、憤を收め、御筆の迹こ

久しうして
(久しくし
て)

そ、賤が伏家の寶なれ。幾ばくもなき世に、朝夕、君と仰
ぎて、かしづき奉るべし」と、おし戴きて歸れりとぞ。そ
の後、元祿十五年の冬まで、八介はながらへて、復讐の
噂を傳へ聞きしか、いかに。(藤岡作太郎)

九 孝道

孝子は、常に、親を思うて忘れず。故に、その一舉一動、
悉く、皆、孝道の發現となる。孝は、最も明に、逆境におい
て現るれども、又、常に、順境においても現れざるべか
らず。孝子傳中の人が多く、逆境の人たるは、已むを得

ざるに出づるものにして、順境の人も、その孝たる所
 以において、毫も、これに異なるべからず。逆境におけ
 る孝のみ、あに、理想の孝ならんや。理想の孝は、順逆兩
 境に應じて現れざるべからず。要するに、常に、親を思
 うて忘れざるもの、庶幾はくは、孝道を全うするを得
 んか。さとし草にいはいはく、

岡山侯光政君、常に、書よむことを好み給ひ、國の政
 事、聖の教にかなひて、國中、皆、その徳に服せざるは
 なかりき。或時、御弟君と、同じく、母君の御前に坐し
 給へりしが、母君、光政君にうち向ひて宣ひけるは、

さとし草
 二卷。兒島願
 齋の著。

「江戸への通行に、奴の、槍振ること、いかが致し候ふ
 か。その様見たし」と、御意ありければ、光政君、畏り奉
 るとて、直に、箒をもて、槍になぞらへ、裾をからげて、
 奴のまねをなし給へり。母君喜び給ひて、弟君にも、
 所望と、御意ありけるに、御返答なくして、唯、笑を含
 みてのみ居給へるを、光政君、後、目に睨ませ給ひけ
 り。日を経て後、弟君は、いかが思はれしぞ。われら、幸
 に、國を領することなれば、母君の御傍にて使はせ
 給ふ人、また、御膳に供ふるものなどは、大抵、御不自
 由はあるまじ。然れば、たまたまにも、御意ありしこ

ありあう
有る

とを、いかでか背きまつるべき」と、御孝心のほど、おのづから、御顔色に現れて仰せければ、御傍にありあふ人、感ぜざるはなかりきとぞ。
また、寛永の頃にや、京に、勘兵衛とて、衣裳の繪をゑがくことを業として、父に孝なる男ありき。父、常に、酒を好みて飲めども、家の貧しきを悲みて、樂まざりければ、勘兵衛夫婦、これをうれへて、千兩箱一つ求め來りて、瓦石を満てて、夫婦して、これを昇き出でて、父に向ひ、われら、年來まうけし金、これほどあり。これを、酒の價となさば、何ほど飲みたまふとも、

えも(得)

えも盡し給はじ」といひければ、父、大いに喜び、それより、思のままに飲みて、まことに富めりと思ひきとぞ。

近時、静岡縣田方郡函南村に、仁科啓助といふ農あり。資性溫良、母に仕へて、よく、孝を盡す。四鄰稱して、青年の模範となし、遂に、明治四十三年一月、村大會の席上において、その徳行を表彰したり。その調査書にい

はく、
母、今年六十三歳、多年、喘息の痼疾あり。榮養少く、身體衰弱、冬期、四肢の自由を缺く。啓助、兄姉を助けて、

唯、母の意に背かざらんことを期す。常に、浴場、人の居らざる隙を候ひて、母を入浴せしめ、その際、母を、毛布に包み、背負うて往復す。大小便の世話、亦、啓助の手による。啓助、時に、他の青年と共に、菓子舗に立ち寄ることあれども、いまだ、一箇の菓子をも、手にせず、必ず、二三錢の飴、或は、葛など購ふを、例とす。これ、母に供する料にして、母の喜ぶを見て、樂となすなり。母、冬期に至れば、老病のために、身體温らず。啓助、種種苦心したりしかども、その效なし。終に、身を以て温むるに至る。

以上の數例、皆これ、親を思ふ至情に出づ。決して、虚偽にあらざるなり、虚飾にあらざるなり。かの、何等の熱誠なく、熱情なき輕薄者流のなし能ふところにあらざるなり。

古語にいはく、「樹靜ならんと欲すれば、風やまず。子孝ならんと欲すれば、親いまさず」と。これ、實に、人生、至大の恨事なり。然れども、孝は、親の死と同時に終るものにあらず。死後の孝養あり、祖先への孝養あり。孝、あに、生に事ふるのみならんや。

樹靜ならんと云云
韓詩外傳に出
でたる語。

一〇 舊師に贈る

(前略)今回、御尊父様御看護のため、御郷里へ御轉任の趣、御知らせ下され、御孝心の程、御尤と存じ、同情の至に御座候。御兩親には、餘程御高年と存じ候へば、何卒、御生前に、十二分の御孝養なし上げられたく、わが身の境遇に引き較べ、切に願ひ上げ候。實は、先月二十五日は、小生一生涯における最大悲歎の日にて、これあり候。そは、豫て、京都大學病院にて療養中なりし母を失ひしゆゑに候。將來の樂の大半を失ひ、一時は、ほとほと、世の

先月二十五日
明治三十九年
九月。

生者必滅
佛經の語。

無常を感じ、今生の生活も厭に相成り申し候へども、又、生者必滅は、天理の定れる所とも悟り、今は、人力の及ぶ所にあらずと諦め居り候。御蔭を以て、家計も、追追豊に相成り、これより、聊か、鴻恩の萬分一にも報いんと思ひ居り候處、忽焉として奪ひ去られ、養はんと欲すれば、親在さずの歎を、目前に見るに至りたるは、實に、斷腸の思に、これあり候。

母なき歎は歎として、想ひ起せば、わすれも申さず、小濱中學創設の當時、小生の身上に就き、かれ

忝うせし
(忝うくせし)

これと御盡力、御周旋を忝うせしことを。幸に、今日あるを得候こと、ひとへに御高恩と存じ、今一度、御目にかかり、御禮申し上げたく存じ候へども、遠隔の地、かつは、御同様に、公務ありて、儘ならず、何卒、小生の微衷のある所を御了察なし下されたく候。目下勤務の潜水艇は、今なほ、經驗中に屬し、隨つつて、危険の事柄も少からざれども、死生の運は、天に在ることと悟り、熱心に、勤務罷り在り候間、御放念なし下されたく候。又、昇任に對しての御祝詞ありがたく、これ皆、先生の御蔭と存

隨つつて
(隨つひて)

じ候。

市川君とは、時時往復、先生の御尊致し候。頓首。

(佐久間勉)

一一 アレクサンドル大王の逸事

世に、功名心もたぬ人はなけれど、アレクサンドル大王ばかりの人は、また無かるべきか。大王は、弱冠の頃より、既に、その、おそろしき功名心に驅られ、父王が戦勝の報、王宮に達する毎に、荐に、歎息の聲をもらして、嗚呼、父王は、われをして、功名の餘地なからしめんとすと、かこち居たりきといふ。二十歳の時、父王の死後を受けて、マケ

アレクサン
ドル
(三〇五年—
三三八年)
父王
名はアイリ
ホ。ギリシア
を統一し、更
に波斯を討た
んとして、刺
客に殺さる。
(二七九年—
三二五年)

マケドニア
トラキアとい
リリアとの中
間にある、今
トルコに屬
す。

ドニアの王位に即きしが、掌大の地もとより、その大志をみたすべくもあらねば、大王は、遂に、波斯征討の大軍を起しき。銳鋒の向ふところ、亞細亞の全土、大半、その馬蹄に委したりき。この戦役は、大王の史傳中、最も興味あり、最も光彩あるものにして、その陣中の逸事、頗る多し。左に譯出せるは、その一斑に過ぎざれど、また、以て、その全豹を窺ふに足らんか。

その一

小亞細亞の東南の端に、タルズスといふ町あり。チドヌス河、その中央を流れたり。一撃の下に、大王は、こ

ダリオス、
コドマヌス
ダリオス三世
と稱す。(一三
三一年)



像肖王大ルドンサクレア

こをも征服し給ひぬ。河水の、見るから清げなりければ、王は、衣服を脱ぎて、その中に入りて、浴し給ひしほどに、劇しき熱、急に、身中に發り、顔色蒼白に、四肢慄ひ戦きて、仆れかかり給ひ、纔に、侍臣に扶けられて、水を出で給ひぬ。頃しも、波斯王大ダリオス、コドマヌスは、大軍を督して、進軍の途にありければ、全軍の驚一方ならず。いかにもして、大王の、一日も早く快復ましまさんことを祈れり。されど、王

の病は、益重りに重りて、今は、侍醫の人人も、救ひま
らせん道なし」といふに至れり。

ここに、心まめなる侍醫の、フィリップスといふがあ
りけり。王の病革れるを見て、いたく、心を悩したりし
が、ほかに、救ひまゐらせん道もなかりければ、かれは、
つひに、最後の手段に訴へて、事を、萬一に決せんと思
ひぬ。その、進めんとする薬は、頗る危険のものなれど、
この危険を冒すにあらでは、遂に、救ふべき術なきを
いかにせん。かく思ひ定めつつ、その薬劑をととのへ
つつありしをり、大王は、その、信任し給へる大將バル

メニオ將軍より、祕書を受け給ひぬ。書の大意は、王よ、
フィリップスを信じ給ふことなかれ。かれは、波斯王に、
心を寄する疑あり。まゐらせん薬こそ、危険のきはみ
なれ」とありけり。大王は、しづかに讀み了へて、そと、枕
の下に推しやり給ひぬ。折しも、フィリップスは、薬を捧
げて入り來ぬ。王は、右手に、盃を取り、左手に、さきの祕
書を取りて、侍醫に渡し給ひぬ。フィリップスの讀み了
へし頃は、はや、王の、薬を飲み干し給ひし時なりき。侍
醫は、由なき疑を釋かんとて、口を開かんとせしほど
に、王は、軽く、手を以て、これをとどめ給ひ、余は、汝を信

宣ひ。

ず。事の結果は、汝の邪正を、明に立證すべし」とぞ宣ひける。かくて、藥效空しからず、王の病は、直に、快復の運に向ひ、三日の後、病牀の人は、再び、馬上の人となれり。これを傳へ聞きける將士等、みな、王の物を疑ひ給はぬ。赤心と、その大膽にして、決心固きとに驚かざるは、なく、益、畏敬の念を増したりきといふ。

その二

ガウガメラの戦に、波斯の全軍、殊死して戦ひ、その勢、實に當るべからざりき。されど、マケドニア軍の進退、よく、その法にかなひ、最後の勝利は、遂に、大王の上

ガウガメラ
アツシリアの
アルベラなる
一小村落。

に落ちぬ。ダリオスも、今は、遂に、退軍の已むなきに至れり。マケドニアの軍、これを追ふこと、頗る急なり。やがて、砂漠の中に出でぬ。さすがのマケドニア軍も、連日の戦に疲れて、今、この、一望きはみなき砂漠の中に出でければ、その困苦いふべくもあらず。全軍渴すること甚しけれど、あはれや、そこには、一滴の水もあらざりけり。

ここに、一兵士の、少許の水を見出したるが、あり。これは、この、貴き水を、われ一人飲むに忍びず、胃の鉢に盛り捧げて、恭しく、大王の馬前に進めり。王は、こゝち

よげにうなづき給ひ、汝の厚意は、快く受けん。されど、われひとり、湯を醫するに忍びんや」とて、それを地上にうちあげ給へり。王の、この同情の心は、いたく、全軍の將士を感激せしめ、見よ、大王の、われらと、苦を共にし給ふを。かかる王に従はんこそ、われらが、至大なる名譽なれ。今は、水火をも辭すべけんや」と叫びて、全軍、また、勇み勇みて、進軍せりとなん。

その三

ダリオスは、遂に、その臣下のために弑せられぬ。大王の旗下の士、波斯王の死に瀕して、途上にあるを發

見せり。苦しき息の下より、波斯王は、一盃の水を乞うて、一息に飲み下し、その兵士に向ひていふやう、われは、汝に、この恩を報ずる時なきを憾とす。されど、汝の大王は、必ず、われに代りて、汝を賞せらるべし。往いて、汝の大王に、『われは、今、ここに、快く、わが全土を、大王に捧げまつるべし』と告げよ」と。かくいひ畢へて、遂に瞑目せり。大王は、直に、ここに來給ひぬ。この光景に對して、限なき感慨の念に打たれ給ひけん、みづから、わが上衣の金絲燦爛たるを脱ぎて、そと、波斯王の死屍の上、に掛け給ひ、詞はなくて、そぞろに、暗涙に咽び給ひ

五月二十七八日
明治三十八年
戦うて
(戦ひて)

朝鮮海峡
九州と朝鮮と
の間の海峡。

きとぞ。

一二 日本海の大戦 その一

天佑、神助に依り、わが聯合艦隊は、五月二十七八日、敵の第二、第三艦隊と、日本海に戦うて、遂に、殆ど、これを撃滅するを得たり。

はじめ、敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基き、これを、近海に迎撃する計畫を定め、朝鮮海峡に、全力を集中して、徐に、敵の北上を待ちしが、敵は、一時、安南沿岸に寄泊したる後、漸く北行し來れるを以て、豫定の

如く、數隻の哨艦を、南方に配備し、各隊は、一切の戦備を整へ、直に出動し得る姿勢を持したり。

果然、二十七日午前五時に至り、哨艦信濃丸の無線電信は、敵艦見ゆ。東水道に向ふものの如しと警報せり。全軍踊躍、直に、對敵行動を

開始せり。



片岡艦隊
中將片岡七郎の率ゐたるもの。
 東郷艦隊
少將東郷正路の率ゐたるもの。
 出羽艦隊
中將出羽重遠の率ゐたるもの。

午前七時、哨艦和泉亦、敵の北東に航進するを報じ、片岡艦隊、東郷艦隊續いて、出羽艦隊も、午前十時、十一時の交、壹岐、對馬の間より、沖の嶋附近にいたるまで、時時、敵の砲撃を受けつつ、終始よく、これと接觸をたもち、詳に、敵情を電報せしかば、海上、濛氣ふかく、展望五海里以外に及ばざりしこの日も、數十海里を隔てたる敵影、恰も、眼中にうつれるが如く、既に、敵の艦隊は、その第二、第三艦隊の全力なること、その陣形は、二列縦陣にして、その主力は、右翼の先頭に立ち、その他の艦船約七隻は、その後尾に續けること、その速力は、

迎へ

瓜生艦隊
中將瓜生外吉の率ゐたるもの。

約十二ノットにして、なほ、北東に航進せること等を知り、本職は、これにより、わが主力を以て、午後二時ごろ、沖の嶋附近に、敵を迎へ、まづ、その左翼の先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり。
 午後一時三十分、主力艦隊、装甲巡洋艦隊、瓜生艦隊、各驅逐隊、および、出羽、東郷艦隊等、前後して來り會し、暫時にして、正に、わが左舷にあたる南方數海里に、敵影を發見せり。ここにおいて、戦闘開始の令を下し、わが全艦隊に對し、
 皇國の興廢、この一戦に在り。各員、一層奮勵、努力せ

よ。
との信號旗を掲げたり。而して、主戦艦隊は、斜に、敵の先頭を壓迫し、装甲巡洋艦、これにつづき、他の諸戦隊は、いづれも南下して、敵の後尾を衝けり。これ、わが豫定戦策なり。

敵は、わが壓迫を避けて、稍、右舷に、舵を轉じ、ここに砲火を開始せり。われは、暫く、これに耐へて、距離、六千メートルに近づくに及び、猛烈に、敵の左右の先頭艦に、砲火を集中せり。敵は、これが爲に、益、東南に壓迫せらるるものの如く、自然に、不規則なる單縦陣となり、

ついで
(ついで)

われと並航の姿勢をとりしが、わが全隊の砲火は、距離の短縮とともに、益著き効果をあらはし、その左翼の先頭艦、ラスラビヤの如きは、須臾にして撃破せられて、大火災を起し、旗艦クニヤージ、スワロフ、二番艦アレキサンドル三世も、また、大火災に罹り、相ついで、戦列を離れしかば、敵の陣形、いよいよ亂れ、他の諸艦、また、火災に罹れるもの多く、炎煙、西風に襲きて、忽ち、海面を蔽ひ、濛氣と共に、全く、敵影を包みぬ。これ、午後二時四十五分にして、彼我の勝敗は、既に、この間に決せしなり。

千早
通報艦なり。
廣瀬
中佐、名は順
太郎。
鈴木
中佐、名は貫
太郎。

われは、煙霧のうちに、敵影を發見する毎に、緩に、これを砲撃しつつ、敵の前路に出でしかば、敵は、俄に變鍼して、北方に、遁走を試みんとせり。われは、急に、その前路を扼して、再び、南方に壓迫し、猛射せしかば、敵の諸艦は、多大なる損害を受けて、頗る、混亂を極めぬ。この間に、壯烈なる事蹟として、特記すべきは、千早、および、廣瀬、鈴木の兩驅逐隊が、敵の敗艦スワロフに對し、二回まで、勇敢なる水雷攻撃を決行せしことなり。かくて、われは、洋上に彷徨、離散せる殘敵を、縦横に搜索して、これが撃沈につとめぬ。この時、夕陽、すでに

春き、わが驅逐隊、水雷艇隊は、漸次に、敵に逼れるを以て、主戰艦隊は、日没と共にひきあげ、同時に、本職は、全軍北航して、明朝、鬱陵嶋に集合すべしと傳令せしめ、ここに、當日の晝戰を結了せり。

一三 日本海の大戦 その二

この日、朝來、南西の強風、浪を揚ぐることに高く、夕刻に至りて、風、やや和きたれども、浪、なほ靜らず。洋中の水雷攻撃は、不利尠からざりしが、各驅逐隊、および、艇隊は、この千歳一遇の時機を失せんを恐れ、皆、風濤を

争うて
(争ひて)

冒して、日没前に來り會し、各先を争うて、敵の周圍に蝟集し、午後十一時頃に至るまで、連續肉薄して、激烈なる攻撃を加へつ。敵は、探照砲火を以て、極力防戦せしが、遂に、この攻撃に耐へず、僚艦相失して、四分五裂の状態となり、各一方の血路を覓めんとせしかば、わが追撃のために、一場の大混戦を現出し、少くも、敵艦三隻は、この間に、わが水雷に罹りて、全く、その戦闘航行力を失ひぬ。後日、捕虜の言を聞くに、當夜、水雷攻撃の猛烈なりしは、殆ど、言語に絶し、左右應接に遑なく、かつ、その距離、あまり近き爲に、備砲、俯角の度を過ぎ

露國 第二三 東洋艦隊

艦種	艦名	噸數	艦種	艦名	噸數
戰艦	スワロフ	二五二六	巡洋艦	オレング	四六四五
同	亞歷山三世	二五二六	同	スウェートラナ	四七七
同	アリヨール	二五二六	同	ゼムチユーガ	四〇二
同	ポロヂノ	二五二六	同	アルマーズ	四八五
同	ラストラビヤ	二六七四	同	イズムルード	四〇三
同	シツイベリキ	一四〇〇	海防艦	アブラキシシ	四二六
同	ナワリーソ	一〇〇六	同	ウシヤーク	四二六
同	ニコライ一世	九五九	同	セニヤウキン	四九〇
裝甲巡洋艦	モノマフ	五五九	同		
同	ドンスコイ	六〇〇			
同	ナヒーモフ	八五二			
巡洋艦	アウローラ	六七二			

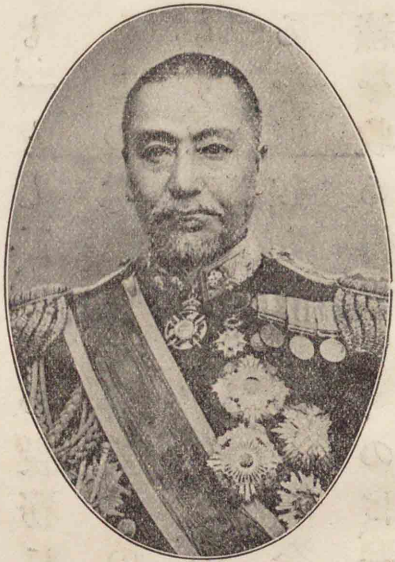
て、照準する能はざりきといふ。
二十八日、黎明、濛氣拭へるが如し。既に、鬱陵嶋附近にありし、わが艦隊は、はやくも、東方にあたり、艦隊の煤煙數條あるを發見せり。これ問はずして、殘敵の主力たるや明なり。即ち、三方より、これを包圍す。もとよ

り、敗餘の敵艦、已に、多大なる損傷を負へるのみならず、わが優勢に抵抗し得べきにあらざれば、砲火の開かるるや、須臾にして、白旗を掲げ、敵艦司令官ネボカトフ少將は、その戦艦四隻を舉げて、部下と共に、降意を表しぬ。本職は、特に、將校以上に、帶劔を許して、これを受けたり。

驅逐艦漣、陽炎は、鬱陵嶋附近において、敵の驅逐艦二隻の遁走し來れるを發見し、極力、これに追及して、戦闘を開始せしに、その後續艦は、遂に、白旗を揚げぬ。これ、ビエードウイにして、敵艦隊司令長官ロゼスト

ロゼストウ
エンスキー
中將
(一八五九
年)

ウエンスキー中將、および、その幕僚の移乗し居るを知り、その乗員と共に、これを捕虜となせり。



東郷平八郎肖像

聯合艦隊の大部が、北方追撃の戦果を收むるに汲汲たる際、南方、前日の戦場においても、亦、相應なる殘獲ありて、敵艦

數隻を撃滅したり。

抑、日本海を通過せんとせし敵艦隊は、約三十八隻にして、わが撃滅、或は捕獲に洩れたりと認むるもの

は、巡洋艦、驅逐艦、および、特務艦、各數隻に過ぎず。この二日間の戦闘において、わが失ひたるものは、水雷艇三隻のみ、その他、多少の損害を蒙りたるものあれども、一として、今後の役務に、支障あるものなし。

この大戦における敵の兵力、われと、大差あるにあらず。敵の將卒も、また、その祖國の爲に、極力奮闘したるを認む。しかも、わが聯合艦隊が、よく、勝を制して、奇績を收め得たるものは、一に、

天皇陛下の御稜威の致す所にして、もとより、人爲の能くすべきにあらず。殊に、わが軍の損失、死傷の僅少

なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信ずる外なく、嚮に、敵に對して、勇戦したりし麾下將卒も、皆、この成果を見るに及びて、唯感激して、そのいふところを知らざるものの如し。(東郷聯合艦隊司令長官公報による)

一四 生存競争

地球上には、動植物各種をして、自由に増加せしむべき餘地は、少しもない。そこに、動植物の各種が、遠慮なしに、多數の子を産むのであるから、互の間に、劇しい競争の起るのは、見易い道理ではあるが、その有様

釋迦

を、詳しく論ずるには、まづ、諸生物の生活する有様から考へてかかれねばならぬ。植物なしには、草食動物は生きて居られず、草食動物なしには、肉食動物は生きて居られぬ。草食動物を飼ふ人は、初より、毎日、若干の草を、犠牲に供するつもりでなければならず、又、肉食動物を飼ふ人は、初より、日日、若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。これらのものが、相並んで、互に犯さず、共に生存して行くといふことは、到底出来ぬことである。昔、印度の釋迦が、山中で、難行苦行をしてをられる

名は悉達、中天竺摩竭陀國淨飯王の太子。佛教の祖。
（三八年一八一八年）

處へ、惡魔が、ためしに來た話がある。まづ、鳩に化けて、飛んで來て、「お釋迦様、今、鷹が、私を捕つて食はうと追ひ掛けて來ます。何卒、憐れと思つて、御助け下さい」といつたので、釋迦は、直に、鳩を、懷に入れて、隠してやつた。所へ、また、惡魔が、直に、鷹に化けて、飛んで來て、「お釋迦様、私は、久しく、物を食はず、非常に、腹が減つてをります。今追ひ掛けて來た鳩を食はなければ、必ず、直に餓死します。何卒、憐れと思つて、今の鳩を出して下さい」といつた故、釋迦は、どうしたら好からうと思案した後、自分の腿の肉を、少し殺ぎ取つて、これを、鷹に與へ、遂

助ける
(助くる)

に、鳩をも、鷹をも助けられたといふことである。もとより、これは、苟も、慈悲、忍辱を旨とするものは、この心掛でなければならぬといふ譬で、教訓としては、最も妙であるが、實際、この方法で、鳩も、鷹も助けられるかといふに、なかなか、さうは行かぬ。もし、世の中に、鳩も一羽、鷹も一羽より無く、これを、僅に一日だけ助けるのなら、差支はないが、總べての鳩と、總べての鷹とを、兩方ともに、何時までも助けることは、決して出来ぬ。幸、悪魔が、一回だけより、鳩と鷹とに化けて來なかつたから宜しいやうなものの、もし、根氣よく、このた

めしを、何回も繰り返したならば、腿の肉が、一度に、半斤づつとしても、十回には、五斤となつて、今度は、釋迦が死んでしまふ。

又、長閑な春の日に、野外に散歩して見ると、草木の、青青と茂り、花の、美しく咲いてをる處に、蝶が、面白さうに飛び廻り、小鳥が、楽しさうに歌つてをる。詩人は、これを、詩に作り、畫家は、これを、繪にかいて、共に、この世の楽しさを賞め讃へるが、それは、極めて皮相な感とで、少し、丁寧に考へて見たらば、世の中は、決して、かう無事、平穩なものではない。鳥が、かう歌つてをられ

かいて
(かゝて)

るのは、今日までに、數千萬の蟲を食ひ殺した結果で、歌ひながらも、なほ、蟲の命を取らうと探してをる。又、蝶が、かう舞つてをられるのも、幼蟲の頃に、澤山の菜類を食ひ枯した結果である。而して、彼處の樹の枝には、蝶を捕へて食はうと、蜘蛛が、巧に、網を張つて待つてをるし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて食はうと、鷹が、鋭い目を見張つて、狙つてをるから、蝶の命も、小鳥の命も、殆ど、風前の燈の如く、一つ油斷すれば、忽ち食ひ殺されてしまふ故、なかなか、氣樂に遊んでばかりはをられぬ。動植物は、總べて、かやうに相殺し、相

遊んで
(遊びて)

食ひ合つて、自然界の平均を保つてをるのである。かかる所へ、年年歳歳、動植物の各種が、夥しく、子を産むのであるから、その多數は、無論、他の動物の爲に、餌として食ひ殺され、生き残るものも、餌を得る爲に、甚しく相争はなければならぬ。動植物の増加力は、實際無限であるが、それは、代代産れる子が、悉く生存し、繁殖するものと假定した上のことで、現在の如く、いつも、産れる側から、他の動物に、その大部分を食はれてしまふ場合には、もとより、著しい増加の出来る筈がない。なほ、その上に、一地方における、各種の動物の

食物の總量には、常に、制限があつて、生き残つたものが、皆食ふことは、到底出來ぬ。かりに、兎が、一疋居るのを、犬が、二疋で見付けたとしたならば、先に、兎を捕へた犬は飽食し、後れた方は餓死せねばならぬ譯ゆゑ、如何なる動物も、食ふ爲の競争は免れぬ。又、兎の、二疋居る所へ、犬が、一疋來れば、速く逃げた兎は生き残り、遅い方は食はれてしまふ譯ゆゑ、大抵の動物は、食はれぬ爲の競争も、避けることが出來ぬ。動植物ともに、各自、皆、食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬやうにと競争してゐるのが、實際の状態で、これ

を生存競争といふのである。(丘淺治郎—進化論講話)

一五 奮闘

奮闘セザレバ、勝利ナシ。(シオベンハウエル)

境遇カ、ワレ、境遇ヲ作ル。(ナポレオン)

生命ノ存スル間ハ、ソコニ、望アリ。(キケロ)

河深ケレバ、流靜ナリ。(シユクスピア)

吠ユル犬ハ、眠レル獅子ヨリモ、遙ニ有用ナルコトアリ。(アービンズ)

數多ノ事件ヲナスベキ捷徑ハ、一時ニ、唯、一事件ヲ

ノミナスニアリ。(リチャード、セシル)
怠惰ハ、猶、錆ノゴトシ。使用セザル鍵ハ、錆ニヨリテ
腐蝕シ、日常使用スル鍵ハ、光輝ヲ放ツ。(フランクリン)

一六 伊能忠敬の晩學 その一

忠敬、年十八にして、伊能氏の養嗣子となり、五十歳
にして、家を、その子景敬に譲るまで、自ら抑へて、平平
凡凡の人となり、一意専心、ただ、伊能家の衰へたるを
興し、おのが任務を、最も圓滿に、最も麗しく果さんこ
とを期し居たりき。

忠敬
東河と號す。
下總國武射郡
小堤村神保氏
の子。(二四〇
五年—二四八
一年)

抑へ。



伊能忠敬肖像

およそ、才氣ある者の常として、己が欲せざること
には、一舉手、一投足の勞をも惜み、單に、己が欲すること
にのみ、身を委ねんとす
るは、免れがたき習なり。
たとひ、己が欲せざること
なりとも、その爲さざ
るべからざることなる
以上は、甘んじて、わが情を
屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事をなすは、その
人、ただに、才氣あるのみならず、また、實に、徳量ある人

といふべきなり。

世に、才氣ある人は多し、才氣ありて、徳量ある人は少し。年少くして、才のみ優れたるは、譬へば、鋭き刀の、肉薄きがごとし。物を截ることはよくすべし、折るる恐は免るべからず。されば、世の、奇才を抱きながら、成功を見ずして、中途に、事を廢する例は、數へもつくしがたし。忠敬が、算數、曆術の學を嗜み、かつ、これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて、市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべしといふを、唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひた

すら、家業に丹誠したるが如きは、實に、その徳量の大きいなるを見るべきなり。

かくの如くにして、伊能家は興りぬ。景敬は、家を継ぎぬ。一家の事、また、憂ふべきものなし。忠敬が、伊能家に對する義務は、ここにおいて、圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は、はじめ、閑散の身となりぬ。忠敬の身は、これより、忠敬の自由に用ゐることを得べし。この時は、忠敬、年、既に五十歳、常人にありては、もはや、老境に入るべき時なり。されど、心の壯なる人には、何歳の時も、

前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、わが力を試みるに足るべきなり。忠敬は、常人が、世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、はじめて、學に就き、而して、後、漸く、世に出でんとせり。後の、爲すあらんと欲する者、苟も、眞に爲すあらんと欲せば、青年、空しく過ぎて、身の、まさに、老いんとするを歎ずることなかれ。

一七 伊能忠敬の晩學 その二

さるほどに、忠敬は、その郷里佐原を出でて、江戸に

佐原
下總國香取郡。

一
天
一
三
寸
三
寸
三
寸

來り、寓を、深川に定めて、一學生となれり。年こそ老いたれ、實に、一學生となれるなり。尋常一様の、笈を負ひて、郷關を出で、都門に遊びて、師を尋ぬる書生と異るところは、ただ、その若きと、老いたるとの差のみ。かくて、忠敬は、身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し、信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから、幕府には、曆法改正の舉ありて、これがため、特に、大阪より、高橋作左衛門といふものを召された。り。作左衛門は、東岡と號して、算數、曆象の學に精し。忠敬、急ぎ、東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直に、師弟

曆法改正
寛政九年に成
る。寛政曆と
稱す。
高橋作左衛
門
名は至時。(二
四二四年―二
四六四年)

強ひ

の契を結びぬ。時に、忠敬は五十歳にして、東岡は三十歳なりき。普通の人情にては、おのれより、年若き人に會ひては、たとひ、おのれが學業など、その人に及ばずとも、なほ、強ひて、自ら高ぶり、あへて、頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、流石に、さる事なく、喜びて、それが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるを、屢、笑柄となしたりといふ。

晩學のかたきは、實に、いつの世にありても、かかる嘲笑の存するが爲なり。ここを以て、非凡の士にあら

抱いて
(抱きて)

ずば、大抵、自ら恥ぢて、師に就き、學を修むる勇氣を失ひ、終に、空しく、志を抱いて、墓穴に入るに至るなり。元來、老いて學ぶは、たまたま、その志の淺からざるを顯すに足るのみ。また、何の不可あらん。況や、また、何の恥づべきところかあらん。思ふに、區區たる、群小の嘲笑も、忠敬においては、ただ、蛙鳴、蟬噪を聞くが如くなりしならん。かかれば、忠敬と同門生との優劣、勝敗は比較するまでもなく、明なることなり。忠敬の學術は、さながら、堤防の決潰して、洪水のおし寄するが如き、勢を以て、歩を進め、終に、その學の蘊奥を極めて、東岡

測量の命を蒙る
寛政十二年、
はじめて北陸
道、および蝦
夷地測量の命
を受く。

門下に、肩を比すべきものなきに至れり。
かくて、忠敬が、はじめて、幕府より、測量の命を蒙り、
その、修得したる學術を、實地に運用する機に際した
るは、實に、五十六歳の時なりき。五十六歳といへば、人
は、暮齡用ゐるに堪へずとする年齢なり。されど、忠敬
は、氣力旺盛、さながら、壯年の人の如く、測量の命下る
に會ひて、喜色、滿面に溢れ、即日にも出發せんとする
勢ありきといふ。忠敬が、事に當りて、勇往直前、險阻に
屈せず、風濤に辟易せず、遂に、その志すところを完成
したりしは、一に、この、元氣勃勃として、燃ゆるが如き

熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。たれか、日本人
を、早熟、早老の人種なりといふ。これ、あに、われに、伊能
忠敬あるを知らざるものにあらずや。(幸田成行)

一八時

ナポレオン
(二四二九年
—二四八一
年)

ナポレオンは、最もよく、時間の大切なることを知
つた人であつた。時間の使用が、巧妙を極めたからこ
そ、あのやうな、比類ない大功を奏したのである。嘗て、
オーストリア軍の敗北を嗤つて、彼等は、五分時間の
價値が幾何なるかを、知らない爲に敗れたのである。

嗤つて
(嗤ひて)

ワテロロ
の戦
西曆一八一五
年六月十八
日。ワテロ
ローは、ベル
ギー國アラバ
ント州にあ
り。

消え。

といった。この時間の英雄ナポレオンが、ワテロロ
の戦で、一敗地に塗れたのも、みづから、時を誤った
のと、部將グルーシーが遅参したとの爲である。

成功の秘訣を教へた名言に、「思ひ立つ日が吉日」と
いふのがある。思ひ立つや否や、即時に、その事に著手
すると、興味が涌くやうで、わが身が、勤勞に従事して
ゐるのも忘れてしまふ。従つて、自ら、事業も、速に進捗
するものである。もし、思ひ立った日に始めないと、當
時の興味は、索然として消え失せ、他日、これを始める
に、非常の困難と痛苦とを感ずるばかりでなく、成功

ヘラクリト
ス
ギリシアの哲
學者。初めて
萬物循環論を
唱ふ。

の一段になつても、即時に著手したのに劣ることを
免れない。それで、或大商店では、規則を設けて、書狀は、
即日返答すべし」と定めたといふ。事をなすのは、種子
を蒔くものが、一度、季節を失ふと、遂に、蒔くことが出
來ないやうなものである。汝は、同じ河水で、再び沐浴
することば出來ぬ」といふ、ヘラクリトスの言は、河水
は流れて息まず、時は往いて還らず、大事も、興味も、元
氣も、熱心も、一度去つては、再び得られないのを謂つ
たものである。

何事でも、なさればならぬことば、直に爲すに限る。

明日ありと云云
古歌に、明日ありと思ふ心のあだざくら夜半に嵐の吹かぬものは。

世の失敗者の多くは、明日ありと思ふ心のあだ櫻を、夜半の嵐に吹き散されて、茫然自失した者である。事は、時機を失つてならぬこと、なほ、鐵は、その、紅いうちに打ち、枯草は、太陽の輝いて居る間に乾さればならぬやうなものである。古來、偉人と呼ばれ、豪傑と稱せられた人は、大抵、皆、分陰を惜み、機會を捉へた人である。時を誤るものは、責任を誤るもので、斷じて、世間の信用を受くることはない。ウォシントン^{ワシントン}は、一日、その書記が遅刻して、時計が遅れたから」と辯疏するのを

ネルソン
イギリスの海軍提督。トラファルガーに、フランスの艦隊を破りて戦死す。二四一八年―二四六五年

聞いて、それでは、直に、正確な時計を買へ。そでない、私は、他の書記を備ふから」といひ、フランクリンは、常に遅刻勝の奴僕を嗤つて、善く辯解する人は、何の役にも立たぬ人だ」といひ、ネルソンが、或時、軍艦に乗らうとする前夜、御者が、明朝正六時に、馬車をまはしませう」といふと、ネルソンは、それより、十五分前に來よ。一定の時より、十五分前にあるのは、余が余たる所以である」といった。ナポレオン、一夕、諸將を、晚餐に招いたが、時刻になつても、諸將が來なかつたので、ナポレオンは、一人で、食事を始め、方に、食卓を離れようとす

る頃、諸將が漸く來たのを見て、諸君、食事の時間は、既に過ぎた。さあ、各自の職務に服しよう」といった。

時間を大切に守るは、責任を盡し、義務を重んずる所以で、身を立つる基である。(立身策による)

一九 南極探検 その一

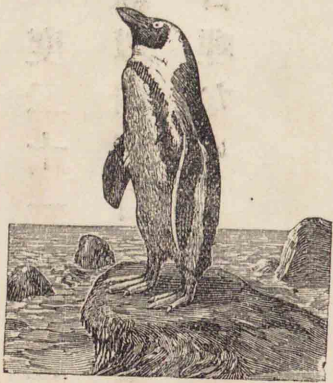
南極圏内にては年中、全く晴天を見ること能はず、雪、霧、風、霰、こもごも來り、南方極地の方は、映光の爲にあかけれども、他は、鉛の如き、一種氣味わるき天色を示し、北方の天は、黒暗暗の大幕に鎖されて、寂寞の境

を示せり。この時、あかき南方の極地に、船を進むるは氣味わるく、却って、黒暗暗たる北方の戀しき心地するも、人情なるべし。もしそれ、險惡なる天候に遭逢せんか、風は、檣頭に激し、氷塊は、舷側に觸れて、その響、人の心をかきむしるが如く、爲に、何人の談話も聞き取りがたく、身は、秒一秒、奈落に引きつけらるる心地して、不快、いはん方なし。

二月十三日、霧の晴間に、グラハムラントの一角を認めて、水平線上に並列せる冰山を望みながら、氷塊の間を縫ひて進み行くに、不幸にも、暴風に逢ひて、氷

能はず

塊に封鎖せられたり。翌朝、風の方向の一轉すると共に、一條の血路を開き、西方に向つて進航せしが、二十八日に至りて起りたる暴風濤は、前回よりも更に烈しく、天地暗黒、毫も、航路を認むること能はず。船は、木の葉の如く翻弄せられて、その危険いふばかりなれば、氷陸の陰に、港らしきものを求めて、危難を避けんと決心し、冰山と冰山との間、わづかに、一條の通路あるところより突進せり。幸にして、船體は堅牢なりければ、無數の氷塊をば、箒を以て、芥を掃くが如くに押し遣り、徐徐として、南へ南へと進み行きぬ。



ペンギン鳥

二十九日朝、風は、北東に變じ、冰山の間なる、一條の航路は、北方に開けずして、却つて、南方に向ひて開けたり。われわれは、幾度か躊躇したる後、意を決して、南方に進み、絶えず、氷塊と戦ひて、二晝夜の間、九十哩を行きけるが、遂に、尺寸も進むこと能はず、また、退くこと能はずして、三月四日には、全く、氷の囹圄に禁錮せられぬ。この邊は、洋鷹の、常に翱翔すると、飛ぶこと能はざるペンギン鳥が、滑稽なる風姿を以て、初めて、人間といふ動物を

見たる珍しさに、遠慮なく、イ子として見舞ひ來るとの外は、何物をも見ず。

われわれの封鎖せられたる地は、正しく、南緯七十一度二十一分、西經八十四度五十五分を示し、南極圈線以内三百哩、地學上の、所謂地軸を距ること一千一百哩なり。

二〇 南極探検 その二

船は、氷陸の内部に封鎖せられたるまま流れはじめぬ。流るといへども、四邊の氷田は、少しも形を變ず

るに非ず。船は、少しも動くに非ざれば、依然として、本の地點に靜止せるが如く、纔に、太陽と星との位置によりて、一日五哩以上、四十哩以下の速力を以て、西南の方に、氷の大陸と共に漂ひ行くを知り得るのみ。

かく流れ行く中には、いづれの表面か裂けて、水平線上に、或は、陸地の一角を發見することもやあらんと、の覺束なき望は、各人、齊しく抱く所にして、これこそ、眞の陸地なれとの叫を、日として、聞かざることなし。されど、悉く、これ、水平線上の雲の影なり。桅上に登りて、四方を看渡せば、目に、變化を與ふるものは、氷田

興ふる

の上に、條を引ける、多くの裂目の、日毎に變化すると、遙なる氷山の、突然、その位置を換ふると、處處に、低きは二呎、高きは二十呎の氷丘の點綴せると、ペンギン鳥と海豹との近づき來るとのみ。

五月十六日、この日、太陽は、水平線下に沈みたる儘、また昇り來らず。一千七百時、七十一日間、全く、夜の世界となれり。煙の如き水蒸氣は、暗憺として、四邊を蔽ひ、極光は、爲に、灰色に變じ、北方の天は、寂しき黄色を帯びて、嵐は、絶えず、南方より吹き、溫度は、漸次に降下して、零下十度、二十度、三十度、はては、零下四十五度の

寒氣を迎へたり。永き極地の夜ばかり、人の勇氣を沮喪せしむるものはなし。況や、孤影蕭然として、前途の運命は、絶望に近く、氷の浮嶋に、一身を託せる時においてをや。

十八日、水蒸氣薄らぎて、極光の、最も、光輝あるに乗じ、遠足を試み、粗き氷の表面に、橇を驅りて、北方に向ひ、一氷丘の、最も高きものに登りぬ。この日、南方の天は、鈍き青白の色をなし、北方は、例によりて、黄色をなせり。偶、正午、北方の水平線上に、太陽あらはれ、忽にして没し去りぬ。その間、僅に數分時、橙色の空に、光なく、

熱なく、不快なる金色を帯びたる半身を現したるに過ぎざれども、一千七百時間の永夜中に、吾人を、心中より喜ばしめたるものは、唯、この一事あるのみ。一行雀躍して、故郷の天を仰ぐ。(世界探検による)

二一 端艇につきて友人に贈る

ひさしく、御近狀を詳にせざるが、御起居いかが。山も、水も清きあたりに遊びくらされて、平生御自慢の水練術を、湘南の荒磯波に試みらるる愉快、さこそと存じ上げ候。

湘南
相模の海濱の
地を稱す。

こちらにては、暑さ、日に増しはげしくて、日中などは、殆ど堪へがたきほどに候。散歩もならねば、書見もなり難く、せめては、水邊の涼しきあたりへと存じて、四五日前より、東京に残れる諸友を催し集めて、日毎に、隅田川に参り、例のボート漕習を試み居り候。はじめのほどは、君達の留守中に、一かどの勉強をなして、來春のレース場には、人目を驚しくれんなどの野心もなきには候はざりしかど、射るが如き日光の暑さに堪へかねて、折折は、岸頭の楊柳に、舟を繋ぎ、洲邊の蘆荻に、

覺えて

權をとどむるなど、遊行の方にのみ傾きゆきて、
 漕習のことは、いつか、全く忘れ果て候。かくて、不
 思議にも、僕等は、ここに、今まで、嘗て知らざりし、
 一種の樂を見いだして候。隅田河といへば、直に、
 ボートを思ひ、ボートといへば、レースより外な
 き様にのみ思ひ居りし僕等は、レース以外、樂の、
 更に大いなるものあるを覺えて、今は、なかなか
 に棄て難くなり候。そは、水の樂にて候。
 ある日、某先生をおとづれし時、ふと、このことを
 いひ出でたるに、先生には、君等は、よく、そこに心

品海
 品川灣、東京
 灣内品川町附
 近の海をい
 ふ。
 筑波
 常陸國にあ
 り。古來、わ
 が邦の名山に
 推さる。

づかれしよ」とて、大いに、ボート遊戯改良のこと
 を述べられしが、その趣意は他ならず、ボートに
 は、もと、レースの樂以外に、水の樂といふものあ
 りて、ことに、都下ボートの漕習所たる隅田河は、
 下に、品海あり、上に、三叉の江ありて、房總の山山
 さては、富士、筑波の晴嵐さへも、一目に眺め渡さ
 るる境なれば、その間に、船を放ちて、浩濤、漫波に、
 積日苦學の胸を洗ひ、しづかに、名山、大川の風を
 賞して、春花、秋月の趣を味はんは、まことに、この
 上もなき快事にして、嘗ては、これらも、皆、ボート

競うて
(競ひて)

によりて得らるる樂なりしなり。されば、同じ體育を目的とするものの中にも、兼ねて、心神をも養ふべき、好箇の遊戯として、われも、人も、競うて、ボートに赴きしなり。さるを、レースの技、年を逐うて盛なるに隨ひ、ボートといへば、ただ、レースの爲とのみ思ひ、舟に上れば、レースコース以外には、舟を行るべき所もなき様に思ふこととなれるは、まことに惜むべきことにて、ボートの樂は、爲に、その過半を奪ひ去られたりといふ事にて候ひき。

かくて、先生は、君等の心づきしを幸、これより、同志相依りて、大いに、その改良を圖られよ」とて、懇なる諭言もありしかば、僕等は、一層悟る所ありし様に覺えて、同志と共に、日日、その事ども相談致し居り候。いづれ、御歸京の上、委しき事は申し上ぐべく候へども、まづ以て、御贊成を願ひたく、ここに、一書を呈し候。匆匆。

二二 農業の快樂

農業は、人をして健全ならしむ。すべての人は、樹木

適へる

と同じく、大氣中に生活せざるべからず。しかして、農業の生活は、概して戸外的なるを以て、最も、この目的に適へるものなり。

農業は、人をして著實ならしむ。いかに性急なればとて、播きたる種の、直に實らんことを望むものはあらじ。また、いかに、奇法ありとも、播かぬ種の生ずべき理は無からん。所謂、「人事を盡して、天命を待つ」といふ妙理は、手を、農業に染めて、はじめて、よく、これを了解するを得べきなり。

農業は、人をして、科學的精神を養はしむ。農業は、常

に、天然と接するものなり。されば、その發達、その變遷、その活動の妙機は、仔細に、これを觀察することを得べく、また、その間に、おのづから、因果の理法の、整然として、動すべからざることを會得し得べきなり。

農業は、人をして、美趣を解し、詩情を養はしむ。支那の陶淵明は、嘗て、その詩情を、田園に養ひ、その詩材を、農業に取りて、千古の大詩人となることを得たりしにあらずや。その他、詩趣を、無名の野花、幽草の上に討ねて、自然の美を歌ひ出で、大詩人たる名譽を荷ひ得たるもの、東西、古今、その例に乏しからざるなり。

陶淵明
晉の詩人、名
は潛、淵明は
その字。(一〇
二四年—一〇
八七年)

農を、本業となす、もとより可なり。他の職業に従事するもの、これを、餘業となす、亦、頗る可なり。掌大の庭園も、數株の花木を培養するには、あまりあり。況や、かの、地方に、別墅を有する人においてをや。これほど容易なる事はなかるべく、また、愉快なる事もなかるべし。これを、かの、鳥獸を殺戮して、一時の快を貪る銃獵の如きものに比すれば、その趣、その樂、あに、啻に、香壤の差異あるのみならんや。(徳富猪一郎)

二三 レシングの比喩譚

レシング
ドイツの大文豪。主として、批評の筆をとれり。(二三八九年—二四四一年)
思へらく

鷺毛の純白なるは、まことに、霜雪と、その美を競ふに足れり。嘗て、一箇の鷺の、頬に、その羽毛の美を誇れるがありて、窃に思へらく、わが前生は、恐らくは、鶺鴒なりしならん。これより、かれは、その同類と交ることを屑しとせず、ひとり、その群を離れて、強ひて、鷹揚なる態度を装ひつつ、優然として、池上に逍遙せり。かくて、かれは、ふと、わが頸のつけねの短きに過ぎて、外觀の醜きに心づきぬ。やがて、満身の力を籠めて、それを引き延さんとせり。されど、そは、あだなりき。かれの頸のつけねは、あまりに、武骨に過ぎて、引き延さんにも、力

及ばざりき。さても、かれが苦心の結果は、いかなりしぞ。かれは、鵠となること能はずして、却りて、一箇の畸形なる鶩となれり。

伴うて
(伴ひて)

曾て、一匹の驢馬を、その危難より救ひたりし獅子の、それと相伴うて、森に行けるあり。無遠慮なる鶏、これを見て、樹上より叫んでいはいく、「英邁なる君よ、君は、驢馬の如き輩と伍するを恥ぢざるか」と。この時、獅子は、徐に、「何者たりとも、來りて、余に投ずる者には、余は、好みて、任俠を施さんとす」といへり。英雄豪傑は、いかなる弱者をも棄てざるが故に、かれらは、常に、その下に

に集ることを喜ぶ。

亂暴なる一少年を乗せて、さも得意氣に、ここかしこ駆け回れる馬あり。牛、その馬に對ひ、「さばかりの少年に御せらるること、汝が、至大なる恥辱にあらずや」といへば、馬は振り反りつつ、事もなげに答へて、「されど、いま、この一少年を振り落したればとて、余は、幾何の名譽をか博し得ん」といへりきとぞ。

二四 殊勝なる武者振

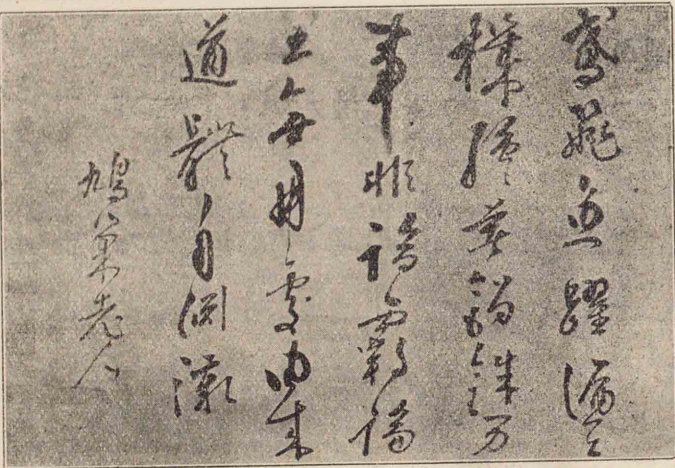
徳川秀康卿、越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部と

徳川秀康卿
家康の子、豊
臣秀吉に養は
れ、後結城氏
を嗣ぐ。(二二
三四年—二二
六七年)

て、武功のほまれありし者を、厚祿にて、召し抱へられ
 けり。また、狛伊勢とて、これも、國にて、世祿の歴歴なり
 しが、嫡子に、鎧の著初せさせけるに、かの掃部を招待
 して、子に、鎧を著することを頼みけり。さて、饗膳いで
 て、祝の盃に及びし時、伊勢、今日は、愚息が、鎧の著初に
 て候ふまま、御身の御武功の事、御物語り候ひて、かれ
 に御聞かせ候へ」といひしに、掃部、いや、某が身の上に、
 御話し申すべき程の武功も、覚え申さず候ふ。されど、
 御望默し難く候ふまま、某、一生の内に、武者振の見事
 なる士を、一人見申して候ふ。その事を御話し申すべ

掃部
 伊勢

志津が嶽の
 戦 天正十一年四
 月、羽柴秀吉
 と柴田勝家と
 の戦。志津が
 嶽は、伊香郡
 にあり。
 余吾の湖
 志津が嶽の麓
 にあり。



室直清の書

し。江州志津が嶽の戦に、暮方に、某一騎、余吾の湖のわ
 たりを引き候ひしに、敵とお
 ぼしくて、うしろより、詞をか
 けし故、馬を引き返し候へば、
 その人申し候ふは、『今朝より
 かせぎ候へども、よき敵にあ
 ひ申さず候ふ。御人體を見う
 け、幸とこそ存じ候へ。御不足
 ながら、御相手になり申すべ
 し』とて、進み寄り候ふ故、『それこそ、こなたも望む所に

見え。

て候へ」と、互に、馬を乗り放ち、既に、槍を合はせんとしけるに、その人、「しばし御待ち候へ。今朝より、雑兵を、多く突き崩し候ふゆゑ、槍よごれて候ふまま、槍を洗ひ候ひて、御相手になり候はん」とて、余吾の湖に、槍をうち浸し、二三遍洗ひて、「さらば」とて、突き合ひしが、久しく、勝負なかりし程に、日も暮れ果てて、物のあやめも見えずなりぬ。その時、あなたより、又詞をかけ、「もはや、槍先も見えず候ふ。御名残多くは候へども、これまでにて候ふ。御暇申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ。某は、青木新兵衛と申す者にて候ふ」とて、某が名をも

候はば

承り候ひて、「この後、また、陣頭にて出で合ひ候はば、互に、人手にはかかり申すまじく候ふ。もしまた、身方にて候はば、わりなく入魂致し候ふべし。さらば」とて、立ち別れしが、これ程見事なる武士は、遂に見侍らず。いかが成り果て候ふにか」と語りけるに、そのころ、伊勢がもとに、心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。その日も來りて、勝手に居たりしが、この物語を聞き、て、蹂り出でつつ、掃部に向ひ、さても、只今の御物語承り、今更、昔を思ひ、涙を落して候ふ。その時の御相手になり候ひし青木新兵衛は、はづかしながら、われ等に

て候ふ。かく申すばかりにては、浮きたる事におぼすべく候はん」とて、その時の雙方の鎧の緘馬の毛色を、一一いひけるが、一つも違はざりければ、掃部愕きつゝ、さては、久しくて逢ひ候ひて、本望に候ふ」とて、手前にありし盃を、方齋にさし、これを、しるしに」とて、腰の脇指をぬきて、引きけり。それより、方齋が名國に高くなりしほどに、秀康卿の耳にも達せしかば、遂に、掃部と同じ祿にて、召しいだされたりき。(室直清—駿臺雜話)

二五 流泉啄木 (金子元臣)

ゆくも歸るも云云
後撰集蟬丸、
「これや、この行くも歸るも別れつつ知るも知らぬも逢阪の關」。

蟬丸
敦實親王の雜色、和歌に巧みに、琵琶に長ず。

ゆくも歸るも別れつつ、
知るも知らぬもあふ阪の、
關の杉むら風あれて、
わら屋の軒にさす月の、
影さだまらぬ秋の夜や。」
あはれにたへで蟬丸は、
わが愛玩の琵琶一面、
心なぐさにならせども、
みやこ戀しく友こひし、
思はずもらすひとり言、

博雅
源氏。最も音
律に長ず。
（一五七九年
—一六四〇
年）

『心あらん人のきたられよ。』

應とこたへて柴の門、

ころもの袖も露けげに、

『我はみやこの博雅』と、

名のるはいみじの音楽者。』

流泉啄木のひめたる曲、

こよひや弾くとはや三年、

夜な夜なかよふ逢阪山、

石もうなづくま心に、

手をば残さず傳へけり。』

撥もてまねくいり方の、

月のかつらの秋の風、

岩間にむせぶ水のおと、

ああ水のおと秋の風、

今も昔にひびきあふらん。』

二六 佐久間大尉

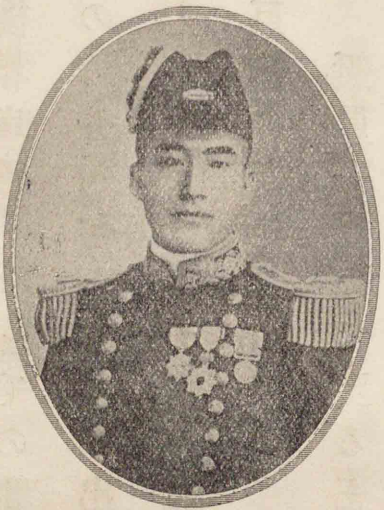
慷慨、節に死するは易く、從容、死に就くは難し。殊に、
不慮の禍に遭ひて、毫も、狼狽することなく、應急の手
段盡くるに至りて、自ら、責任を重んじ、從容として、そ

佐久間大尉
(二五三九年
一二月五七〇
年)

の職に殉せし佐久間大尉の最後のごときは、最も難しとする所なり。

明治四十三年四月十五日、吳鎮守府所轄、第六號潜水艇は、周防の國岩國新港の沖合約一里の處にて、各種の演習に従事しけるが、機關に、故障をや生じけん、俄然、海底に沈没して、その行方を失ひぬ。母艦、僚艦の乗組員は、大いに驚き、直に、百方、搜索を始め、また、無線電信にて、急を、鎮守府に報告せり。されば、府にては、即刻、軍艦豊橋に、派出、救助の命を發し、なほ、驅逐艦、および、水雷艇數隻をも加へて、遭難地に急行せしめたり。

加へ。



佐久間大尉肖像

かくて、搜索の結果、翌十六日午後に至りて、漸く、その沈没の地點を發見せしかば、直に、引揚に著手し、翌十七日の朝、辛うじて、その作業を終へ、艇内の排水と換氣とを行ひ、ここに、始めて、艦内を検するに、潜水後、すでに、數十時間を經過したることなれば、艇長佐久間大尉は、腕を拱きたるまま、端坐して絶息し、部下の乗組員、將卒十一名の勇士、いづれも、或は仰臥し、或は安坐せるまま、勇敢なる死

を遂げて、艇と、その運命を共にし、光景、頗る悲壯なりき。その臨終の際、即ち、艇の沈没後、午前十一時より、午後零時四十分までの間に、大尉の書きし日記あり。その言言句句、至誠より出でたるものにあらざるはなし。はじめに、まづ、艇の沈没の原因、および、その経過を、ナニニ巨細に記したる後、

艇員一同、死に至るまで、皆よく、その職を守り、沈著に、事を處せり。われらは、國家のため、職に斃ると雖も、ただ遺憾とする所は、天下の士の事實を誤解して、ために、將來、潜水艇の發展に、打撃を與ふるに至

らざることなきかにあり。希はくは、諸君、益勉勵して、將來、潜水艇の發展研究に、全力を盡されんことを。

と、部下の、忠實、職に殉せし勇を賞し、一身の安危を忘れて、偏に、國家のために、潜水艇の將來を祈れり。さてまた、至尊に對し奉りては、罪を謝し、部下の遺族のこ

とを思ひては、憐を乞ひていはく、
小官は、茲に、小官の不注意により、陛下の艇を沈め、部下を殺す大罪を謝す。仰ぎ願はくは、わが部下の遺族をして、窮するものなからしめ給はんことを。

わが念頭に懸るもの、唯、これあるのみ。
 最後に至り、海軍大臣以下、上長官に對して、
 さらば、茲に、永き別を告げん。呼吸は、すでに、非常に
 困難なり。今は最後なり。
 と告別せり。

嗚呼、これ、大尉が、死の、刻一刻に襲ひ來るに、從容自
 若として記ししものならずや。この遺文を讀むもの、
 誰か、その沈著に驚き、その悲惨に、涙を流さざるべき。
 何等の壯烈ぞ。

大尉、名は勉。若狹の國三方郡の人なり。沈勇を以て

士規七則
 士ノモルハ千
 七ノ通ノ規則

その中學校
 若狹小濱中學
 校。

知らる。その小學、中學にある間は、修身、歴史に、最も、趣
 味を持ち、品行方正にして、友情に厚く、常に、讀書に耽
 りて、徒に、時を費さず。海軍兵學校にある間は、幸便こ
 とに、海軍思想を、郷里の青年に普及せしめんことを
 圖り、遂に、その中學校に、海軍用ボートを造らしむる
 に至れり。常に、皇恩の忘るべからざるを唱へ、吉田松
 陰の士規七則を愛讀し、その句中の「斃而後已」の四字
 を、宮城二重橋を寫せる繪葉書に書して、士官室に掲
 げ居たりとぞ。

第六號潜水艇の沈没したるは、もとより不測の變

負ひ。

にして、必しも、艇長の罪にあらず。されど、その責を負ひて、職に殉したる大尉は、實に、これ、義勇、公に奉ずるものにして、艇長たる者の龜鑑なるのみにあらず、わが海軍の生命なり、日本武士の典型なり。あに偉ならずや。

二七 わが小園

われに、二十坪の小園あり。園は、家の南にありて、上野の杉を、垣の外に控へたり。ここは、場末にて、家まばらに建てられたれば、青空は、園の外にひろがりて、雲

上野
東京府の公園
の一。

行き、鳥翔けるさまも、いとゆたかに眺めらる。

はじめ、ここに移り住みし頃は、竹藪を拓きたるあとと覺しく、草も木もなき、はだかの園なりしを、やがて、家主なる人の、小松三本植ゑて、やや物めかしたるに、われも、鄰の老媪の與へくれし、薔薇の苗を植ゑ添へて、四五輪の花に、吟興を鼓すること多きやうになりぬ。

一年、軍に従ひて、金州に渡りしが、その歸途、病を得て、須磨に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を経て、家に歸り著きし時は、秋、まさに暮れんとする頃なりき。園の

植ゑて

軍に従ひて
廿七八年の役
に、作者、日
本新聞記者と
して従軍せ
り。
金州
清國盛京省。

故郷
伊豫國松山。

三逕就荒
「……、松菊猶
存」晋の陶潜
が歸去來辭中
の語。

面、去年よりは、遙にさびまさりて、白菊のひと本、ふた
本、ねぢくれて咲き亂れたる、この景に對して、靜に、き
のふを憶へば、萬感、そぞろに、胸にせまり、からき命の
助りて、歸りし身の哀は、ただ、このうれしさに消され
て、思はず、三逕就荒と口ずさむも、涙がちなりき。あり
觸れたるこの花、狹苦しきこの園が、かくまで、人を感
ぜしめんとは、嘗て思ひ寄らざりき。
まして、それより後、病いよいよ募りて、足立たず、門
を出づる能はざるに至りし今、小園は、わが天地にし
て、草花は、わが唯一の詩料となりぬ。われをして、いく

ばくか、獄窓に呻吟するに勝ると思はしむるは、この
十歩の地と、この數種の芳葩とのあるがために外な
らず。

次の年、春暖、漸く催して、鳥の聲、いとうららかに聞
えたる日、病の窓を開きて、端近くにじり出でて、讀書
に勞れたる目を遊ばするに、いきいきせる草木の生
氣は、手のひらほどの中にも動きて、まだ薄寒き風の
ひやひやと、病衣の隙を侵すも、いと、こちよく覺ゆ。
これも、鄰の老媪よりもらひし絲菘の刈株、寸ばかり、
緑をふいて、伸び出でたらん、秋の色も思ひやられて、

醉^〇うたる
(ゑひたる)

うれし。かくて、午過より、夕影、椎の樹に落つるまで、何
を見るともなく、酔うたるが如く、勞れたるが如く、う
つとりとして、その日一日を暮しぬ。(正岡常規)

二八 ボアソナー^ド氏を送る詞

ボアソナー^ド
フランスの
人。法學博士。
明治の初年日
本に聘せら
れ、諸法律の
草案を作り、
又教育に従事
せり。(二四八
五年―二五七
〇年)

余は、一日、朝早く、ボアソナー^ド君を、永田町の家に
訪ひたりしに、君は、例の如く、文机に凭りて、餘念なく、
法條を起草し居られたるが、その顔色衰へて、常なら
ず覺えければ、病やある」と問へるに、やまひは、かくこ
そとて、その足を示されたり。見れば、二つの脚、共に、水

山田司法大
臣
名は顯義、山
口の人、
陸軍中將。(二
五〇五年―二
五五三年)
いへらく

氣に腫れふとりたり。余は、なにゆゑに、靜に養生し給
はざるかと問へば、司法大臣と、約ありて、某の日まで
に、若干の箇條を起草し畢へざるべからず。この義務
は、病によりて背くこと能はず」と答へられたり。余、か
つは驚き、かつは覺束なく思ひて、いそぎ、山田司法大
臣の邸に至り、この由を告げつるに、司法大臣も、とも
に驚かれ、即ち、秘書官をして、君を訪問せしめ、速に、轉
地療養あらんことを勧められけり。君は、約束當事者
の命を受けて、始めて、心おきなく、田舎に轉養せられ
たり。余は、この時、家に歸り、ひそかに歎息していへら

く、およそ、つかさある人人にして、かくまでに深き義務心に伴へる勉強を以て、いそしみたらんには、立法事業、并に、諸般の事務の擧らざることやあるべき」と。この事、一小件なれども、余は、將來、ボアソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價值ありと信ずるがために、別に臨みて、これを、公衆の前に述べ、君の、二十年間の立法上の功績のごときは、他の諸君の演述に譲りて、ここにいはず。余は、實に、ボアソナード君と、二十年來の友なり。場合によりては、わが師なり。ざるを、病のために、餞の席

に臨むこと能はざるは、遺憾のきはみなり。いま書して、君の旅行の安全を祝し、あはせて、左の詞を以て、君を餞す。

余は、君が、わが國を呼びて、第二の本國といへりしことを記憶す。余輩は、將來に、遠く、君を、海のあなたに慕ひ望むと同時に、君もまた、長く、第二の本國を忘れざることを知る。ボアソナード君よ、君の第二の本國が、立法上、および、諸般の事業において、いかに發達するかを見て、幸に、余輩のために、必用なる注意と勸告とを怠ることなかれ。(井上毅一梧陰存稿)

教育部省檢定 中國語學科用校
明治四十五年八月五日

修訂中等國語讀本卷三終

修訂中等國語讀本卷三

一三六

明治四十四年十月十四日修訂印刷
明治四十四年十月十八日修訂發行
明治四十五年一月五日修訂再版印刷
明治四十五年一月八日修訂再版發行

修訂中等國語讀本 (全十册)

定價 各卷金貳拾五錢



著者 故落 合直 文
相續者 落合 直幸

補修者 文學博士 萩野 由之

補修者 文學博士 森林 太郎

印發行兼者 東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹 一平

發行所

東京市神田區錦町一丁目
長電話本局二四三八番

明治書院

(振替貯金口座四九九一番)

